第２６期岡山県産業教育審議会第１回会議議事録

令和２年 10 月 20 日（火）13:30～15:30
県庁３階大会議室

出席委員　考藤委員、草野委員、剣持委員、河野委員、後藤委員、武田委員
波夛委員、服部委員、福田委員、福原委員、山根委員、吉川委員

１　開会

教育長あいさつ

２　委員紹介

３　岡山県産業教育審議会について

４　会長及び副会長選出

・会長として、服部恭一郎委員（日本オリーブ株式会社代表取締役会長、岡山県産業教育振興会会長）を選出
・副会長として、武田浩一委員（株式会社廣榮堂代表取締役社長、岡山県産業教育振興会副会長）を選出
・教育長から服部会長へ諮問書を手交
・服部会長あいさつ

５　議事

(1) 岡山県産業教育審議会への諮問と審議の進め方について

ア　諮問の説明

諮問事項　社会の変化に対応する職業系学科の在り方について

イ　審議の進め方

・審議会の開催計画及び専門委員会の設置
・審議会４回（令和２年 10 月、令和３年２月、７月、10 月）と、専門委員会３回（令和２年 12 月、令和３年５月、８月）を開催し、令和３年 11 月に建議予定

(2) 審議

ア　諮問理由に記載されている次の２つの視点について

・地域や産業界等のニーズに応じた、社会の第一線で活躍できる専門的職業人をどのように育成していくか。
・企業や大学、研究機関等と連携した教員の資質・能力の向上や教育内容・指導方法等の工夫・改善、産業教育施設・設備の充実による質の高い職業教育をどのように推進するか。

イ　高校生の進路選択に関するアンケートについて

広島大学大学院の杉村教授が実施した高校生の進路選択に関するアンケートをどのように分析するか。

（委員）

○　子どもたちは、近い将来、自分自身が親世代になるため、高等学校の家庭科や、中学校の技術・家庭「家庭分野」などで乳幼児との触れ合い体験などを通して、子どもとの関わり方などを学んでほしい。

○　保育士の人材不足が問題になっている。今は、高校卒業時点で保育士の資格取得はできないが、専門高校で、保育技術検定なども活用して、保育に関する知識や技術を確実に身に付け、将来、保育士や幼稚園教諭として活躍してほしい。

（委員）

○　近年、東京圏への人口一極集中が全国的に進む中、本県でも、毎年 3,000 人以上が県外に出ている転出超過が続いており、人口減少が進んでいる。特に、20 歳から 24 歳までの若い世代が一番多く、地元企業の良さをあまり知らないまま、就職を機に都市圏へ出ている者も多いのではないかと考えている。

○　県では、第２期おかやま創生総合戦略を令和３年３月に策定することとしており、現在、若者の定着や、Ｕターン政策等を検討している。そこで、本県の企業の良さが、高校生にどこまで伝わっているのかを知りたい。また、高校生が、郷土岡山を愛する心を育むことも重要である。

（委員）

○　農業就業人口が減少し、担い手不足が深刻である。農業高校の生徒が若い人材として農業に就いてほしいが、農業学科就職者の職業別分類（平成 31 年３月卒）（学校基本調査）によると、農業高校から農林漁業に就く割合は 3.7％で、100 人に対して４人弱であり、大変危惧している。

○　米づくりにおいて、全国でコロナ禍による外食需要の低迷等で米が余り、価格低下が懸念されている。米づくりをやめると土地が荒廃し、水を溜めることができないため、災害の発生が危惧される。農業の省力化等を実現するために、ドローンやＧＰＳ機能等を活用したスマート農業にも取り組み、担い手育成について模索を続けている。

○　本県の新規就農者は 30 歳、40 歳の年齢が多く、作目は果樹、野菜、米麦の順で多い。高校教育の中で、食料の生産や自然環境の保全等を担う農業の大切さを伝えるとともに、儲かる農業経営を実践している内容を教え、次代の担い手を育成してほしい。

（委員）

○　高校生の進路選択に関するアンケートでは、学科ごとに高校の入学動機は主体的だったか、その後、高校でどのように変わったのか、中学校から高校への入学、高校での学びまで、連続性のある俯瞰した分析が必要である。例えば、看護学科は、看護師になるために高校に入学しているので主体性は高い。高校の入学動機があまり高くなかった場合でも、学んでいく中で学習意欲が高まり、授業に主体的に取り組む生徒が増えるよう、対策を考えていく必要がある。

○　子どもたちにとって、高校でどれだけの大人と関わっていくか、その環境づくりが重要である。開かれた学校教育の中で、高校では様々なことにチャレンジしているが、ＩＴの技術を使って、遠隔の人や外国人との交流も行いながら、子どもたちが主体的に考え、自己肯定感を高めることができるよう、支援やきっかけづくりを

行う教育活動を展開してほしい。

（委員）

○　人口減少の中で、県内企業の人材確保が大きな課題である。現在、コロナ禍で雇用情勢が厳しくなっているが、中長期的には、県内の企業に優秀な人材が就職してもらえる体制が必要である。県では、県外大学の進学者へのＵターン就職や、県内大学の進学者への県内企業の就職を促進している。

○　県外大学に進学した場合、卒業後に県内へＵターン就職する者は、関東圏への進学者で約１割、近畿圏への進学者で約３割であり、より一層のＵターン就職者の増加が求められている。

○　高校教育の中では、岡山県立高等学校教育体制整備実施計画（平成 31 年２月策定）に記載されている、大学進学等を機に地元を離れる高校生も対象とした地元企業へのインターンシップ等を推進することが重要であると考えており、引き続き、県教育委員会とも連携・協力していきたい。

（委員）

○　県教育委員会の高等学校魅力化推進事業のうちリーディングモデルとリージョナルモデルとでは、時間の速さが違う。リーディングモデルは世界同時で起こっているＩＴやＡＩにキャッチアップしていく必要があり、今後も短期で変わっていく。その一方で、リージョナルモデルは、地域に密着した産業を捉えると 10 年、20 年あるいは 50 年といった長いスパンで物事を考えていく。この２つのモデルの違いを認めた上で、新しい時代、変化が多い時代の産業教育を議論する必要がある。

○　産業分野で大事なことは、日本一国で考えるのではなく、世界全体を見渡して考えていくことである。例えば、農業において、日本国内では、今は米が余っているが、世界全体では不足していて、飢餓に苦しむ地域もある。日本の農業は優れた先進的な技術があるので、アジアやアフリカへ行って農業指導なども展開している。生徒には、こうしたグローバルの視点を持って、農業に関する技術を学び、世界で果たす役割を考えていただきたい。

（委員）

○　職業系学科の高校は、就職において、本県で活躍する人材を多く輩出していることから、地元の産業にとって生命線である。

○　子どもたちの生きる力を早くから身に付けるためには、家庭での教育はもちろん、中学校の時から、子どもたちにどんな人生を歩んだらいいのかを教えていくキャリア教育が重要である。

（委員）

○　日本はＩＴの推進が遅れており、デジタル人材の育成を重要課題として捉えている。企業としては、技術の習得はもちろん、自らが未来を描いて、創造していく力が必要になっていると感じている。また、自らが目標や課題を設定して、主体的に自らが学んで課題を解決し、他者を巻き込みながらリーダーシップを発揮できる人材の育成が重要であると考えている。

○　高校では、フィールドに出て、企業や地域の方と直接会話をして意見を聞き、肌で感じて課題点を探し、課題をどう解決していくのかを考える取組をしてほしい。また、学校の空き教室を利用するなどして、企業の方と生徒が、世界で起きている

新しい技術に触れ、活用方法について一緒に議論する形が自然に起きるような場の設定もあってもよいのではないか。

○　教員の資質・能力向上については、企業の方が学校で教えることや、教員が企業研修に参加して、企業に求められる能力を学ぶなど、学校と企業の連携がより一層重要である。また、教員免許制度のこともあるが、ダブルワークが主流になってきている企業もあることから、教員免許を所有していない専門職の企業人が、企業で働きながら、高校教育に関わっていく価値観が醸成されると、新しい考えを教育に導入する点で有効である。

○　高校生の進路選択に関するアンケートでは、高校へ入学する時には、おそらく主体的に選んで、この職業になりたいと描いていると思うが、その後も描き続けているのか。そこがぶれると違う分野の職業に就くケースが多いと思う。併せて、その理由も知りたい。

（委員）

○　中学校では、高校、学科の進路選択が主体的にできるように進路指導をしているが、全ての中学生が、この専門高校に行ったら、こんな将来が待っているということについて正しく理解をして、進路選択ができている状況ではない。地元の高校を選び、その中で、この学科に行きたいといった選択となっている生徒もいる。

○　本県の高校では、地域学が進んでいる。中学校２年生では、職場体験を実施しているが、それだけでは不十分であり、中学生の時期から地域をフィールドとした学習を設定し、主体的、探究的に地域のことを学ぶ取組を進めていくべきである。

○　キャリア教育では、小中連携と同様に中高連携も非常に重要である。中学校で地域の課題解決に向けて幅広く考える素地をつくっておくことが、特に専門高校においては、その後の学びにつながっていく。その時に、地域全体を見渡して、中学校、高校、事業所等をつなげる力を持ったコーディネーターがいれば、さらに、地域全体の今後の将来に向けて、子どもの学びがつながっていくと強く感じている。

（委員）

○　本県は、県立全日制高校の職業系学科の割合が約 40％であり、全国平均の 24％よりも高い。また、職業系学科の生徒は県内就職率が 80％を超えており、このことは、以前から産業界にお世話になり、本県産業の一端を担っていることを示している。

○　学校の中だけで学ぶのではなく、地域に出て、地域の子どもたちに教えるほか、地域の課題に行政の方と一緒に取り組んできた。これからは、高校生、大学生、大人が一緒になって、その地域、産業界の中で、何か役割を持たせてもらいながら育っていくことができれば、地方創生にもつながるのではないかと考えている。

○　高校生活に関する意識調査（県教育委員会調べ）で、職業系学科の生徒の高校生活の満足度は高い。例えば、職業系学科の生徒が、どんな体験をして満足しているのか、あるいは自分の進路を決める時に、どんな学びや体験が役に立っているのかといった学科ごとの分析も検討してほしい。

○　産業界のニーズを把握するために、産業界の方にアンケートをする機会があれば、今、産業界は、どんなことを高校生や高校に求めているのかを、調査をしてほしい。

（委員）

○　社会の構成員として必要な力は、共通基盤と特化した要素ではないか。共通基盤

としては、社会への関心や社会課題を見出すとか、それを自分に置き換えて自主的に考えるとか、全体を俯瞰して考える力とか、説得力をもって表現する力が必要になると思っている。そうした力を育てるためには、地域と教育機関の連携は非常に重要である。教員から聞いている話と多少違うことや、別の観点から同じように重要性を教えてもらえる機会があることで教育効果がさらに高まる。

○　高校で生徒１人１台端末の話があったが、大学では、パソコンに非常に慣れている学生がいる一方で、キーボードに不慣れな学生もおり、二極化が見られる。タブレットは重要なツールであるが、キーボードの有無によって大学ではレポートなどを書く機会が多いので、キーボードに慣れておく必要がある。

○　高校生の進路選択に関するアンケートに関連して、大学の医学部、教育学部では、自分の進路を見定めて入学してきた場合が多く、学生の主体的な進路選択に関する意識の高さは、専門高校の生徒の反応はそれに近いものがある。

（委員）

○　子どもたちが主体性を持ち続けることが重要である。教育現場からは、学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けた実践事例を紹介していただいた。

○　地域との連携・協働による教育を進め、子どもたちが社会の中で役割を果たしながら、課題を発見し解決する力を育成していくことが重要である。

○　共通基盤と特化した要素の力を併せ持つことが重要である。特化については、例えば、大学では造船学科など、なくなっている学科もあるが、実際の技術は非常に大切である。

○　次回の審議会に向けて、第１回専門委員会では、学校の現状や課題、生徒の声など、今回の議論と併せて調査を進めていただきたい。

(3) その他

・専門委員会委員長として、山根康史委員（岡山県立高松農業高等学校長、岡山県高等学校産業教育連絡会会長）を選出

・他の専門委員は、各専門学科の教員を中心に、会長に相談の上、選任

６　その他

審議会の第２回会議は、令和３年２月に開催予定

７　閉会

武田副会長あいさつ